

III | [特集1] 映画祭の現在

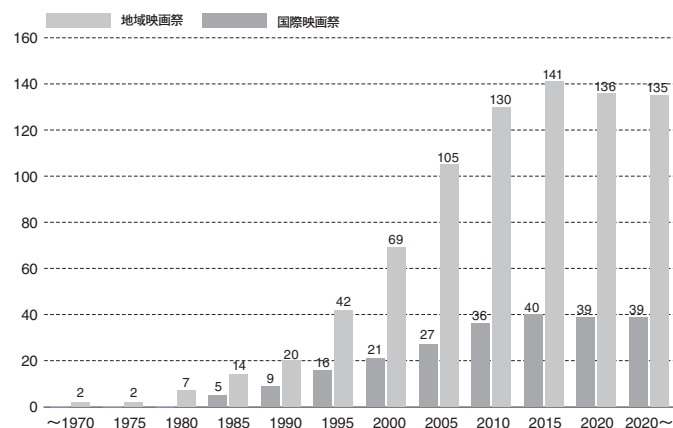
新たな“映画祭の時代”

土田環 | 早稲田大学基幹理工学部/山形国際ドキュメンタリー映画祭

私は、1999年から山形国際ドキュメンタリー映画祭に携わるようになって、主にこの十年間くらい特集プログラムを担当しています。この映画祭の元事務局長で、2018年の全国コミュニティシネマ会議 in 山形の中心を担った高橋卓也さんが、全国コミュニティシネマ会議2022が開催される数週間前に亡くなりました。私はその少し前に高橋さんに会っていたので、大変驚きました。学生時代から上映活動を始めて山形に関わるようになりましたが、私自身は東京に住んでいて、山形事務局の高橋さんなど“市民の映画祭”ということを強く意識されている方とは意見が合わないのではないか、あるいは“映画だけ”を純粹に信じていたいの、なぜ、地域のことやボランティアのことを考えなければいけないのか」と思っていたこともありました。いまは、年齢を重ねたからかもしれませんが、映画祭を形作っているのは映画だけではない、とも考えるようになりました。そのような折に、こうしたディスカッションに参加することができたことに感謝しています。

日本における映画祭は、1970年代半ばに湯布院映画祭、あるいはぴあフィルムフェスティバルといった映画祭が始まった黎明期から、その数を大きく増やした2000年代前半の成長期を経て、現在では180近くの映画祭が開催されています。国際映画祭もあれば地域映画祭もあります。50年近く続けられている映画祭もあれば、始まったばかりの映画祭もあり、消えてしまった映画祭もあります。日常の映画鑑賞形式の変化や上映素材の簡便化は、映画祭の開催方式や会場を変えました。かつては映画映像業界に携わる人々や自主上映団体が中心だった運営の担い

映画祭の数の推移



手も、町おこし、環境問題、ジェンダー、セクシュアリティなど、映画だけにとどまらない社会的・文化的な活動を行う団体や個人が増えていきます。映画祭のテーマも多様化し、長・短編といったフォーマットや作品のジャンルを超えて、「地域」や「食」に関連する作品を集めたプログラムや、ある監督や俳優の特集上映を「映画祭」とするケースも生まれています。このプレゼンテーション+ディスカッションでは、変わりつつある時代のなかで映画祭を維持していくことの「難しさ」や「新しさ」について意見を交わし、その意識や存在意義を共有したいと考えました。

この3年間、映画祭もコロナ禍の影響を大きく被りました。山形国際ドキュメンタリー映画祭も2021年はオンライン開催になりました。オンラインでも映画祭を開催することができるということはひとつの発見でしたが、全国コミュニティシネマ会議で久しぶりにいろいろな方にお会いすることができて、限られた時間に同じ場所に集まり、顔を合わせるということにはオンラインでは感じることでできない喜び、別の楽しみがあると改めて感じました。直接人々が集まること、出会うこと、それが映画祭の最大の魅力のひとつだと思います。

映画祭の3つの機能

私は、映画祭には3つの資本を創り出す機能があると考えています。

①「社会関係資本」を築く

まず、ひとつは「社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)」を築く機能を挙げることができます。これは、「地域社会の中でコミュニティの結節点をつくりだすこと」と言い換えることができます。映画館や映画祭に人が集まることによってつながりが生まれ、その地域社会の中で「セーフティネット」としての機能を果たすことができるのではないかと。「祭」を実施するためには、役割関係や協力体制が必要です。共通の目的のために、ふだんは接点の少ない世代や属性の人々と意見を交わし、合意を形成する場が生まれます。「つながる」というのは、その地域の中にいる人々同士が結びつくこともありますが、その地域の外のもの、映画や他者、自分たち

映画祭が生み出す機能

①社会関係資本(ソーシャル・キャピタル):

地域社会・コミュニティの結節点
地域のセーフティ・ネット、「絆」

②文化資本:

人・モノ・知への出会い→文化の醸成、人材の育成・教育

a) コミュニティの「共有知」や地域の担い手としての学び(責任・役割)

① 世代間の伝承(価値の共有と継承) ② 地域の再発見・再定義

③ 外部者の参加と地域理解

b) 参加する個人としての学び

① 「非日常」の経験による日常の振り返り・離脱 ② 感情表出と自己表現

③経済資本:

社会の経済活動に連動するもの

「ヒト(担い手)」「コト(ルール)」「カネ」「モノ」「情報」

のコミュニティの中では知ることのできないこととの出会いも含まれます。結果として、コミュニケーションが生まれ、映画にとどまらないその地域の資源となっていくのです。

—「文化資本」を形成する

2番目に挙げられるのが「文化資本」を形成する機能です。これは、地域の中で文化が醸成され、人材が育成されることにかかわっています。映画祭が地域に根付いていくためには、そこで上映される映画の芸術的あるいは社会的価値や、「祭」の運営そのものに関する知識が受け継がれていかなければならない。その共同体にとって大切な価値観や知恵が、映画祭を続けることによって世代を超えて継承され、文化資本が蓄えられていくことになります。それは、単に保守的に伝統が継承されるということではなく、その地域を自分たちが再発見し、再定義することにもつながると思います。また映画祭には、地域のコミュニティだけではなく外部の人が参加する機会が少なくありません。そのことによって、地域に対する新しい理解、新しい視点が与えられるのです。

映画祭とは「祭」であり、非日常的な空間を形成します。ふだんと変わりがなく映画を見ることがや友人と出会うことにはない魅力がそこにはあります。自分の知らなかった作品や人間に出会うことの「陶醉」や「自失」のエネルギー、言い換えれば「非日常性」が映画祭の大きな力だと言うことができます。非日常を経験することで日常的な生活を振り返ること、非日常と日常を行き来することによって、スパークのようなものが起こり、それまでの自分が気づかなかった感情や意識が生まれるのです。

—「経済資本」を形成する

最後に挙げるのが、「経済資本」を形成する映画祭の機能です。端的に言えば、映画祭は、その地域社会の経済活動に関わっているということです。具体的には、映画祭を運営・維持をしていくために必要な費用や人材、映画祭の開催によって創出される雇用や観光資源として地域にもたらす経済効果を思い浮かべることができます。当然のことながら、経済資本が投入され、生み出されることなしには映画祭を維持することは困難なのですが、実際には、人間、モノ、情報といったものが「社会関係資本」や「文化資本」をどのように蓄積するかということと切り離してお金の話をするとはできないのです。

なぜ、このような3つの分類をしたかといえば、このディスカッションの中で、国際的な賞レースの重要性やマーケットの有無ではない観点から映画祭を考えてみたいと考えたからです。地域や共同体の中で映画祭が果たすべき役割や使命、掲げている理念について、それぞれの映画祭の具体的な試みや工夫を通して話し合いたいと考えました。

今回の全国コミュニティシネマ会議には、地域やコミュニティの中で様々な役割を果たそうとしている、規模も内容も異なる4つの映画祭の方々に登壇していただきました。

1987年に創設された「高崎映画祭」は、自主上映を行う市民団体から生まれて規模を大きくし、国内のメディアにも強く認識されている地域映

画祭です。今回の全国コミュニティシネマ会議の開催に大きく尽力してくださった盛岡の「〈映画の力〉プロジェクト」は、映画を通じて地域のコミュニティを創造し活性化するという目的を持っていますが、映画撮影のサポートや盛岡に関わる映画の応援上映会等を行うその活動の根底には、映画への愛、映画に触れることの喜びを強く感じます。

二つの国際映画祭にも出ていただきました。「ひろしまアニメーションシーズン」は、1985年から2020年まで続いた「広島国際アニメーションフェスティバル」の後継として、国際的にすぐれたアート・アニメーションを紹介する場であるだけではなく、市民や子どもたちに開かれた多彩な教育普及プログラムを実施しています。そして、リュサス国際ドキュメンタリー映画祭は、あえてコンペティション形式をとらず、そのプログラムの質の高さによってヨーロッパで高い評価を得ている映画祭で、フランスの人口1200人の小さな村にドキュメンタリーを志し、愛する若い観客を多く集め育成することに成功しています。